

看護学生の実習目標到達度に関する考察

—基礎看護学実習Ⅱの実施結果の調査から—

佐藤みつ子, 浅川和美, 奥村百合恵, 坪井良子

本実習は, 基礎看護学実習Ⅰ, すなわち看護の対象としての人々や, 看護活動の場を知ることを目的とした保健・医療・福祉施設の見学実習終了後に行った。

実習目的は, 対象者の理解と基本的ニーズの充足のための看護方法を学ぶことにある。従って, 看護過程に沿って, 対象者のアセスメント, ニーズの把握, 援助方法の選択と実施, 評価のプロセスを学ぶことを実体験した。

実習後の調査で学生は, アセスメント, ニーズの把握の難しさを実感し, 援助方法の選択と実施については, 対象者の健康障害の理解不足から, 適切な援助方法を考え, 計画的に実施することが困難であった。しかし, 本実習を通して, 看護の意義とその重要性について深く認識することができ, 今後の学習の動機づけとなっている。

キーワード: 実習目標, 看護過程, 援助技術

はじめに

看護教育における実習は, 学内で習得した知識, 技術, 態度を実際の場面で適用し, 看護実践を学習する場である。また, 発達段階や健康レベルの異なる対象者とのかかわりを通して, 学生の人間的成長が促される上でも重要である。とりわけ, 基礎看護学実習Ⅱは, 学内で学んだ基本的な看護技術を対象者の特徴をふまえて実践し, 個別的な看護方法の基礎を学習することや初めて接する対象者との喜びやとまどいから, 人間理解の難しさや看護の基盤は人間関係成立に始まることを理解する。さらに, 対象者の健康問題を解決するための思考プロセスの基礎を理解すること等をねらって, 各領域別看護学実習(成人, 小児, 母性, 老年, 精神, 地域)の基礎として位置づけている。

当大学の基礎看護学実習は, 2段階に分けて展開している。基礎看護学実習Ⅰは, 保健・医療・福祉の連携の重要性から, 各施設で実習し, 学びを共有する学習方法をとっている。したがって, 医療機関で実習を体験するものは学生の3分の1であるため, ほとんどの学生は, 基礎看護学実習Ⅱで初めて2週間, 当大学で臨地実習を体験することになる。

そこで, 学生の基礎看護学実習Ⅱの学習成果を把握し, 指導上の課題を見出す必要性を感じ, 実習後の調査を実施し, 看護学生の実習到達度に関して若干の示唆を得ることができた。

I. 調査目的

基礎看護学実習Ⅱの学習成果を知るため, 実習目標の到達度を把握し, 実習指導上の課題を明らかにする。

山梨県中巨摩郡玉穂町山梨医科大学医学部看護学科
(受付: 1997年8月29日)

II. 調査方法

1. 調査対象 本学看護学科2学年60名及び指導教官10名。
2. 調査期間 平成9年2月7日～2月20日
3. 調査方法

実習目標の到達度は, 実習終了直後に, 同一の実習評価表に基づき, 学生の自己評価及び教官による評価を行った。合わせて学生の感想文から分析した。なお, 実習評価表は, 重要視した実習項目により多く配点したため, 到達度の評定は, 3点配点のものは3点のみ, 4点配点のものは4点のみ, 5点配点のものは4点以上, 8点配点のものは6点以上を「できた」として分析した。

III. 基礎看護学実習Ⅱの展開

1. 実習目的
看護の対象を多面的に理解し, 看護過程を通してその人の基本的欲求を充足するための援助方法を学ぶ。
2. 実習目標
 - 1) 対象とのコミュニケーションを図ることができる。
 - 2) 健康障害がその人の生活にどのような影響を与えているかを把握できる。
 - 3) 得られた情報を関連づけて, 情報の意味を考え, 判断できる。
 - 4) その人のニーズを充足するための具体的な方法を考え, 選択できる。
 - 5) その人への援助を安全・安楽に実施できる。
 - 6) 実施した援助を評価できる。
3. 実習方法

対象者を1名受け持ち実習する。受け持ち患者の選定基準は, 中等度の援助を必要とする人(日常生活援助や診療の援助を必要とする人)である。

IV. 結 果

1. 実習目標の到達度

1) 対象者とのコミュニケーション

対象者とのコミュニケーションは、「コミュニケーションのねらいを持っている」「対象者にあったコミュニケーションの手段が選択できる」「対象者の反応を観察しながらコミュニケーションをとることができる」「対象者に接する態度を評価できる」の4つの視点から到達度を評価した。その結果は図1に示すように、対象者に接する態度を高く評価した者が少なかった（学生29.4%，教官56.9%）。全体的にみて、学生は、いずれの項目もできないと回答した者が多く、学生は、教官の評価と比較すると過小評価している傾向が認められた。ほとんどの学生は、患者と直接会話し、コミュニケーションを図ることの難しさ、年齢差のある患者との会話から生じる不安や緊張感、とまどい等を実感し、患者に合ったコミュニケーションが図れなかったとしている。また、少数ではあるが患者に拒絶されて話してくれなかったなどの感想もみられた。一方、患者が自分を受け入れてくれ、患者の言動から多くのことを学んだ。患者を理解するにはいろいろな知識、技術を持っていないこと、必要性を実感した学生も多くいると感じている。

一方、教官の評価は、コミュニケーションのねらいをもっている（70%）、コミュニケーション手段が選択できる（70.6%）、対象者の反応の観察ができる（76.5%）等、学生なりに対象者とのコミュニケーションを図ることはほぼ達成できたと評価しているが、学生の対象者に接する態度の評価（56.9%）は厳しい。

2) 健康障害が生活に及ぼす影響

「健康障害の部位と程度を理解できる」「対象者が健康障害をどのように受け止めているかを理解できる」「治療・検査とそれらが対象者に与える影響を理解できる」「日常生活動作の制限を理解できる」の4つの視点から到達度を評価した。その結果、図2に示すように、対象者が健康障害をどのように受け止めているかを理解できる（学生21.6%，教官27.5%）、治療・検査とそれらが対象者に与える影響を理解できる（学生39.2%，教官21.6%）であり、できたと考える者が少なかった。対象者が自己の健康障害をどう受け止めているかについては、記録や日常の言動から把握できなければ、捉えにくい情報であり、また学生は、過去の治療や検査について記録物などから調べることが精一杯で、それがその人の日常生活にどのように影響しているかを理解するまで至らなかったと感じている。

3) 得られた情報の関連づけと判断

「得られた情報を整理し、分析できる」「対象者の看護上のニーズを明確にできる」「看護の必要性を見いだすことができる」の視点から到達度を評価した。図3に示すように、得られた情報を整理し、分析できる（学生47.1%，教官64.7%）とする者は約半数であった。学生は知識不足のために情報の分析が断片的で関連づけを判断するまでには、時間を要した。対象者の健康上の問題解決過程で最も難しいのは判断の部分であったと実感している。

4) 対象者のニーズを充足するための援助方法

「対象者に合った援助目標を立てることができる」「対象者の状態にあった援助方法を選択できる」の2項目で到達度を評価した。その結果、図4に示すように、対象者にあった援助方法を選択できる（学生50.9%，教

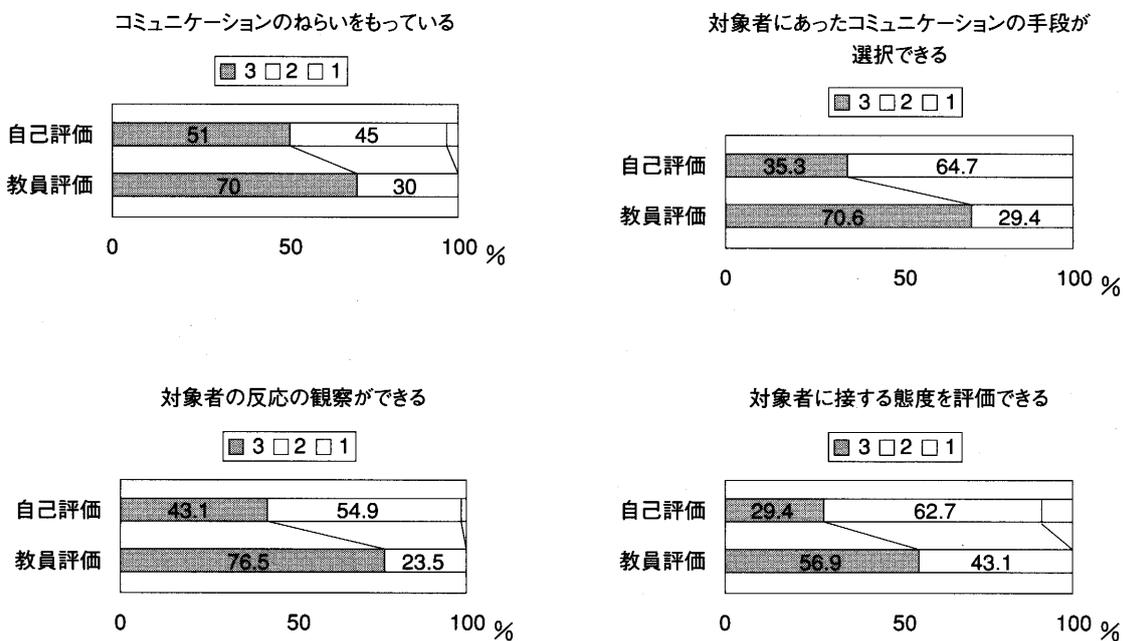


図1 対象者とのコミュニケーション

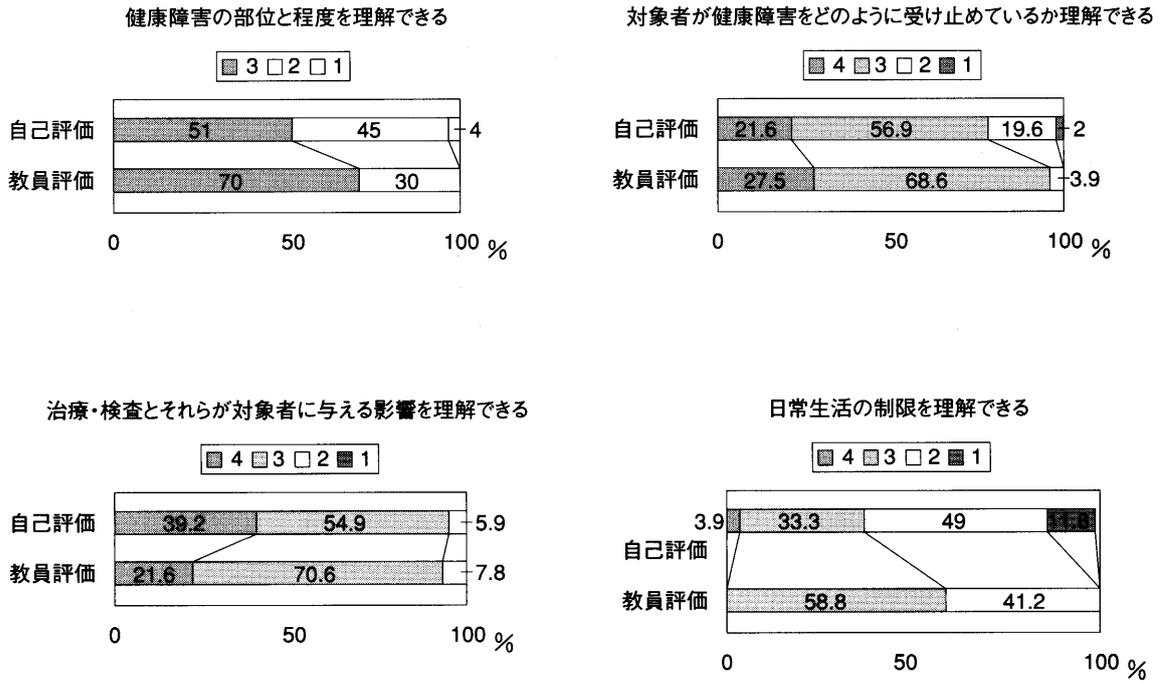


図2 健康障害が生活に及ぼす影響

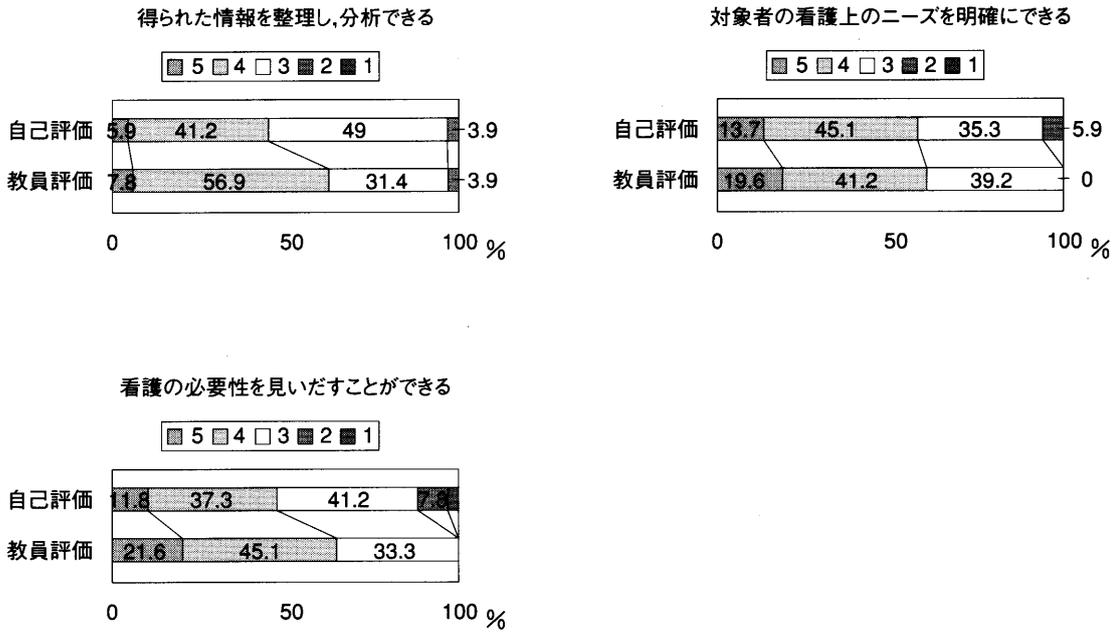


図3 得られた情報の関連付けと判断

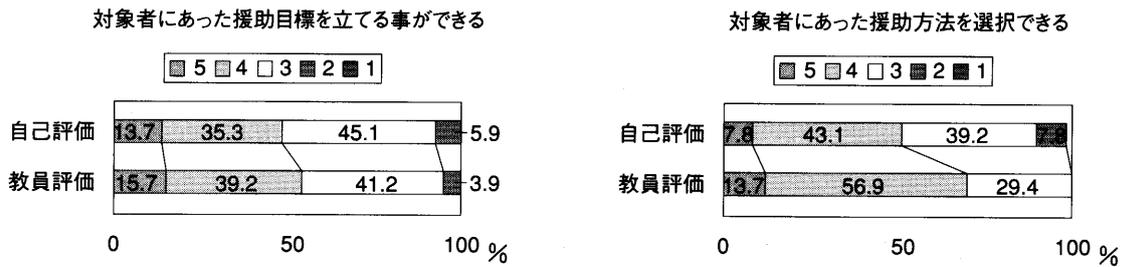


図4 対象者のニーズを充足するための方法

官70.6%)、対象者にあった援助目標を立てることができ(学生49%、教官54.9%)とする者は約半数であった。学生は、一般的な援助方法はあげられるが、目標を立てることの重要性に気づかず、実践の中から初めて患者にとっての目標の意義を理解し、対象者の状況を考えてながら実践していく重要性を学んでいる。教官は、学生の援助行為からその目的を想起させる働きかけが重要である。

5) 安全・安楽な援助

「対象者の援助に必要な準備ができる」「対象者の反応を観察しながら援助できる」「対象者のセルフケア能力を生かして援助できる」「援助技術を正確に、誠意を持って実施できる」「必要なことを正確に報告し、記録できる」の5つの視点で到達度を評価した。その結果、図5のように、必要なことを正確に報告し記録できる(学生3.9%、教官9.8%)、援助技術を正確に、誠意をもって実施できる(学生7.8%、教官23.0%)、対象者の援助に必要な準備ができる(学生19.6%、教官23.5%)が少なかった。学生の感想からは、対象者のセルフケア能力を生かす看護や対象者への援助技術を思いやり、誠意、熱意をもって実施できたが、観察や測定したことを客観的に記述したり、他者に伝達する事の難しさを実感している。報告の重要性の理解はできても適時に行えなかったり、未熟な技術によって患者に不安を与えるのではないかとという恐怖感を抱いたり、学校での演習との違いやとまどいから援助技術の難しさを実感している。特に、バイタルサイン測定の難しさ、正確な測定の重要性、測定値の解釈の重要性を再認識できたとしている。また実施する時の対象者への声かけの大切さ、ボディメカニクスの活用など体験的に学んでいる。さらに既習の方法をそのままマニュアル的に使うのではなく、対象者の状態にあわせた援助方法を自分で考えることの大切さに気づいている。

6) 援助の評価

「対象者の反応をふまえて、実施した援助の評価ができる」の1つの視点で到達度を評価した。その結果図6に示すように、学生51%、教官60.8%であった。学生の感想では、学内で演習ができない部分については、今回初めてのため、評価とは何かがわからなかった、技術の振り返りはできても健康障害をもった対象者に与える影響との関係での評価の仕方がわからなかった等があった。

7) 実習中の態度

「計画性」「積極性」「協調性」「責任感」の4つの視点から評価した。その結果、図7に示す通り、協調性がある(学生80.4%、教官96.1%)、責任感がある(学生72.6%、教官90.2%)は比較的多かったが、計画性(学生37.2%、教官62.7%)については、今後の課題として残されている。

V. 考 察

1. コミュニケーション技術

学生の多くは、患者と初めて接しコミュニケーションの難しさや重要性が理解できている。また個々の条件に合った手段は、自分で考えるものであることに気づいていた。しかし、学生は、目的のあるコミュニケーションがとれないや対象に適したコミュニケーションの手段が選択できるものが少なかったと評価している。受け持ち患者の内訳をみると、60歳後半から80歳代の高齢者が多く、現代の学生の特徴である世代の違う人と接する機会がないなどから、対象者に適したコミュニケーションが難しかったのではないかと推察される。また、既習の知識を想起し行動に移すことの困難さや、患者によっては会話が困難な状態で意志疎通が図りにくいなど、指導者の介入の必要度の高い患者もあったためと推察される。

また、対象者とのコミュニケーションが図れた時、実習意欲がわいた(79.9%)との意見があり、学習成果にも反映しているため、受け持ち患者の選択を一考することも大切であると思われる。学生が発したひとことが患者への励ましになった体験などから、対象者と看護者との相互作用の重要性は気づいているが、対象者に接する態度の評価ができていなかった。それは、態度の評価視点(言葉づかい、身だしなみ、傾聴、意思表示、思いやり等)がわからなかったのが一要因ではないかと推察される。全体を通して、学生は、自己を過小評価しているのに対して、教官の評価が高かったのは、教官は、4年間の実習を通してよりよいコミュニケーションがとれる事を期待して評価するのに対し、学生は臨床の看護婦に焦点を合わせて評価した為、厳しい結果になったと考えられる。

対象者に接する態度については、実習中のカンファレンスや実習後の感想、プロセスレコードなどを用いて、常に自己の態度を振り返るチャンスをつくることが重要である。沼野は、「態度の形成過程に同一経験の反復、衝撃的な体験、模倣の3つがある」「態度は知識や理解の教育によって形成されたり、変容させたりすることが可能である」¹⁾と述べているように、直接的、間接的に助言をくりかえす過程で気づかせることの必要性が示唆された。さらに、今後は実習を通して、対象者の話に注目し、対象者の気持ちに近づこうとする努力や、対象者の言動の奥に流れる心の動きを洞察すること、ことばのもつ意味の重要性を認識し、対象に合ったコミュニケーションの向上がみられるよう、成長していくのを助けていくことが課題である。

2. ニーズの明確化へのプロセス

健康障害の部位や程度は、身体的側面の理解に集中している傾向があった。しかし、その人の生活状況と関連させて理解したり、社会的側面や健康障害に対する対象者の受け止め方に対する情報を得ることは十分にはできなかった。それは、社会的側面や精神的側面のアプローチは個々の状況が異なり、複雑であること、また健康障害の受け止め方の情報を得るには、疾病の経過や予後など、幅広い知識をもって接する必要があることなど、対象者との交流が短期間だけに難しかったものと考えられる。さらに学生にとって、記録上での看護過程の展開と違い、様々な情報がからみあった中から問題点を把握するのは大変であったこと、逆に、健康状態が比較的良好な対象者の場合は看護上のニーズを見いだすことが困難で

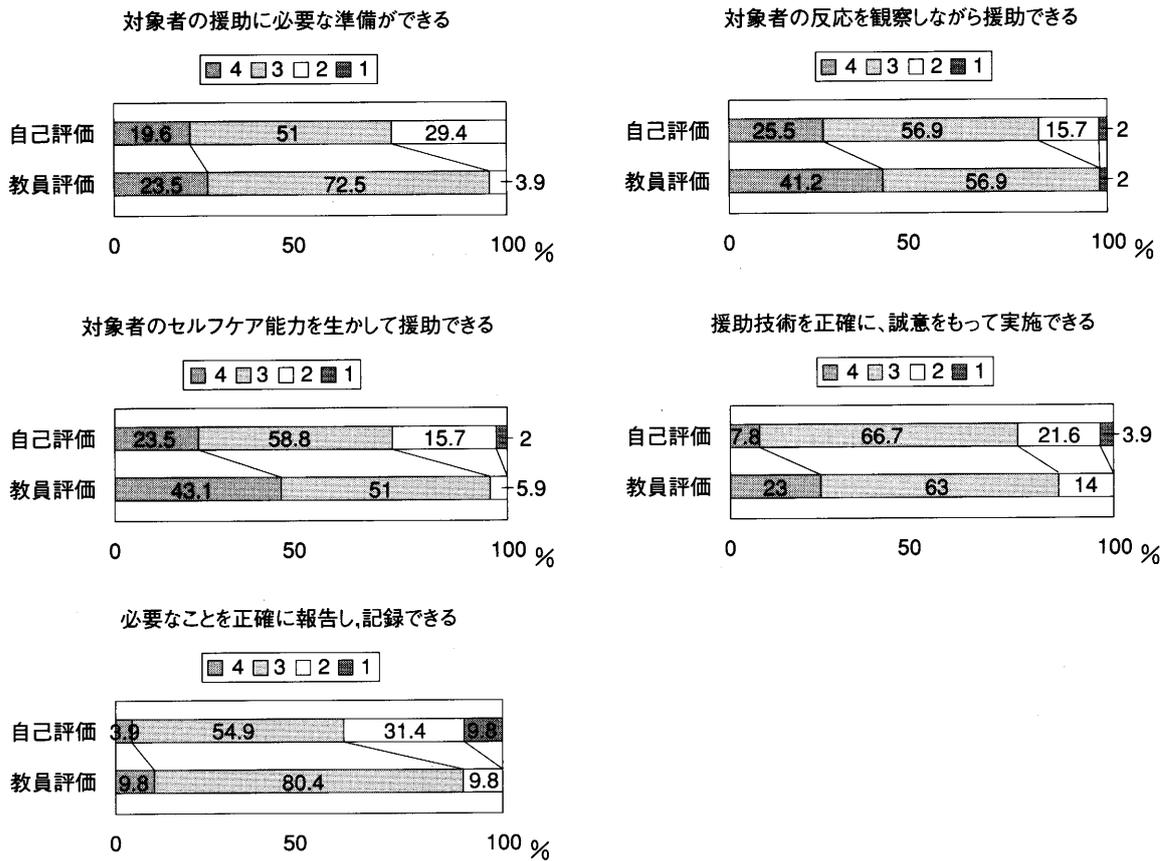


図5 安全・安楽な援助

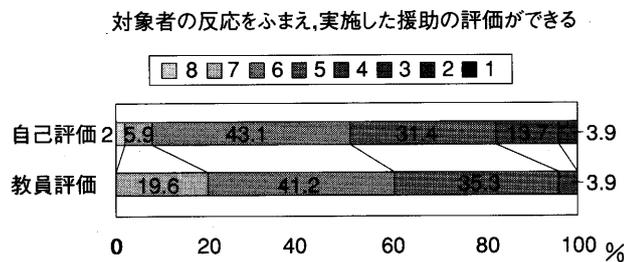


図6 援助の評価

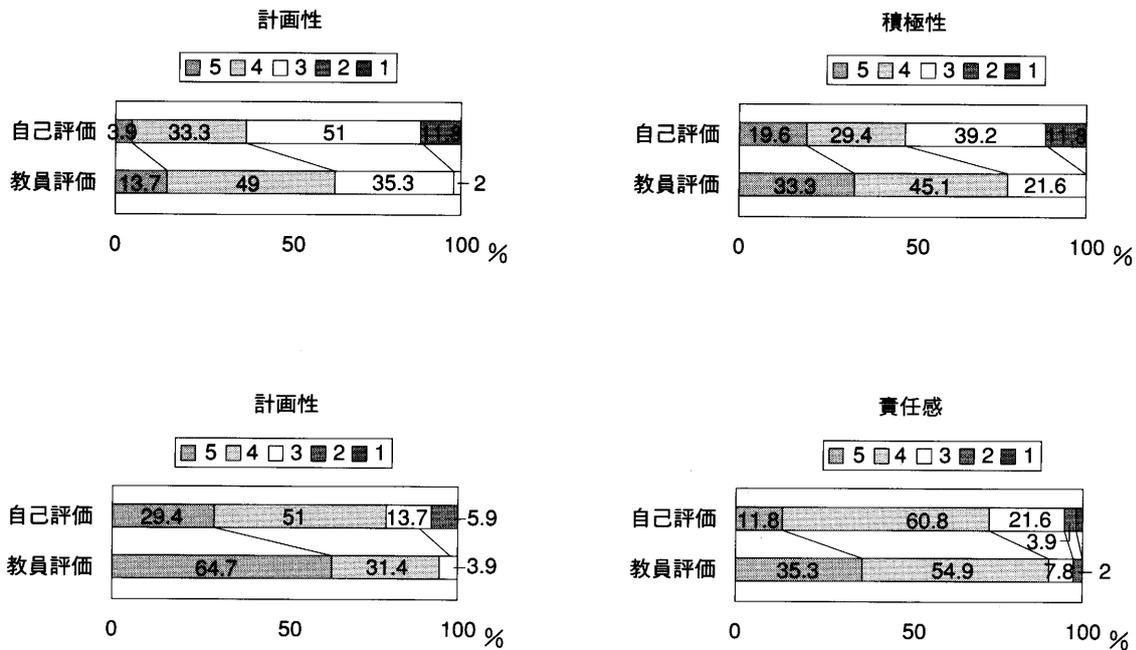


図7 態度

あったと思われる。得られた情報を整理し分析できなかったのは、主観的、客観的情報を混同していたり、生情報を自分の価値観だけで解釈していたりしたためや、既習の病態生理学などの知識の活用の方法が身につけていないためと推察される。したがって、情報の関連づけの科学的分析の過程で助言し、ニーズの明確化へのプロセスを強化することが課題である。

3. 援助方法

初めて実践するためのとまどい、むずかしさを感じていながらも多くの学生は、日常生活の援助を中心に大切な学習を体験できている。それらの体験から、対象のニーズを充足するための個性に合わせた援助の必要性を理解することはできていた。しかし、対象者にあった援助方法の選択ができなかったのは、いくつかの問題が混在しており、問題から具体策を引き出すことが困難なこと、自分が実施したいという学習上の理由が優先して援助計画を立てる者もいたためと推察される。

対象者の援助に必要な準備ができなかったのは、患者や環境、物品の準備があるにもかかわらず、これらを十分認識していないこと、計画した時間の中で自分が主体的に行うという認識が不十分であるからであると思われる。援助技術を正確にできるものが少なかったのは、授業や演習で学んだ援助技術の原理・原則を忘れたものが多く、患者の中には健康レベルが低下している患者や、難しい援助行為を要する場合もあり、準備や実施時に指導者の介入をかなり要するケースもあったからと推察される。

これらのことから、患者中心の看護をするためには、患者が本当に何をしてほしいのか、看護上のニーズは何かなどの思考過程が身につくよう繰り返し指導する必要がある。また、目的、注意点、根拠を考え、個々の援助

計画を立てることが大切であり、そのためには、患者を把握していなければ最適の看護ができないことを再認識させる。また、安全、安楽な援助を実施するための対象者への配慮の仕方の看護モデルを示す等、指導方法を検討する。また学生には、事前に正確に実施できるまで援助方法の錬磨の必要性を再認識させ、個々の状態にあった援助方法を常に創意工夫する姿勢をもたせることが課題である。加えて、学内では対象者の状況がイメージしやすいようにVTRの視聴や参考書から自分なりの手順書を作成して実習に望む事前学習など、教育方法の工夫をしているが、基本的な技術を習得し応用できるような教育方法をさらに検討することが課題である。

4. 看護行為の評価

実施した援助が対象者に与える影響（患者に喜ばれた等）については学んでいるが、自己の援助方法の実施がその人に適しているかなど、実施結果から患者の身体状態の変化に対する評価ができていなかったなどがある。これは、学生の感想にもあるように、学内の授業では、実際の看護実践ができないため、学びにくい内容のためと推察される。このことから、看護行為の評価は、患者の評価と関連づけて評価でき、学習課題を明確にして学習が積み重ねていけるよう自覚させることが課題である。

5. 実習中の態度

はじめての実習であたったためか、計画的に行動ができなかったものが多かった。特に、日々の行動計画は、患者の状態に応じて修正や加筆が必要にもかかわらず、漠然とした計画しか立てられない学生が多かった。計画を立てるということは、学生自身の実習の方向を示すものである。実習での学びが、自ら考え、行動しなければ学習成果が少ないことに気づいていないこと、実習での

学び方が身につけていないためではないかと推察される。

現代の学生は主体性や創造性が乏しいと言われている²⁾。また、学生の中には、実習意欲が高められたのは「適切な指導を受けた時」「指導者が良い看護婦であった時」「学生と共に勉強していこうとする姿勢がみられた時」などが多かった。

これらのことから、実習こそ、個々の学生が既習の知識や技術を統合し、個々の患者の状況にあった学習計画を立て、それに基づき実施する必要がある。したがって、計画性をもった看護をしなければならないことの意識をもたせることが大切である。また学習意欲の向上が、主体的な学習の動機づけになるため、成功したときには、褒め、学習成果や行動変容していることを知らせるなど、適切な指導方法を駆使することが大切である。実習は、学習の必要性を認識し、判断力と主体性を培える場であるため、自ら考え学んでこそ学習成果に結びつくことを実感し、主体性のある学習姿勢が身につくよう支援することが課題である。さらに、実習全体を通して、協調性があり、責任をもって行動できる学生が多かったのは、看護を学び、行う者として不可欠な態度であると考え、これからの実習においても持ち続けてほしいものであると考えている。本実習を通して、看護の意義と重要性について深く認識することができ、今後の学習の動機づけとなっている。

引用文献

- 1) 沼野一男 (1971) : 教育技術ゼミ態度の評価, 看護

教育, 12(11), 28-31.

- 2) 渡辺純枝 (1990) : 基礎看護の臨床実習のすすめ方, 看護展望, 15(2), 139-143.

参考文献

- 1) 森 千鶴, 佐藤みつ子 (1993) : 目標設定の重要性を再認識, 教務と臨床指導者, 6(6), 16-26.
- 2) 佐藤みつ子編著 (1996) : 看護学実習指導シリーズ 1, わかりやすい実習指導案作成, 教育メディア, 東京.
- 3) 関口敏江, 佐藤みつ子他 (1996) : 新カリキュラムがめざす授業—看護過程の考え方と展開, 38-42, 医学書院, 東京.
- 4) 佐藤みつ子 (1996) : 今時の看護学生を指導するには, 96看護部門 NO1, 9(1), 2-7, 東京.
- 5) 小林美智代, 関根龍子 (1995) : 基礎看護実習におけるコミュニケーションの実態—コミュニケーション・テクニックの分析, 第26回日本看護学会集録, 9-12.
- 7) 坂本恵子編 (1989) : 看護実践に生かすプロセスレコード, 広川書店, 東京.

Abstract

On the Attainment of the Goals of Nursing Training —From a Survey of the Implementation of the Curriculum of Basic Nursing II—

Mitsuko SATO, Kazumi ASAKAWA, Yurie OKUMURA and Yoshiko TSUBOI

The training session, Basic Nursing II, is carried out after completion of the course, Basic Nursing Training I which provides students with an opportunity to study the people who receive nursing care and gain experience in a nursing setting at health centers, medical clinics, and welfare facilities.

The purpose of the training session is to help the students to learn nursing methods which will enable them to better understand their clients and fulfill their basic needs. Through this nursing program, the trainees learn how to assess clients, grasp their needs, choose and then use a method to help them, and study the process of evaluation.

The study following the training session showed how difficult it was for the students to assess and grasp the needs of clients. It was very difficult for the trainees to think of and choose ways to help, and then carry out the plan methodically, without a full understanding of the health status or disabilities of their clients.

This training session, however, made it possible for the students to more deeply understand the significance of nursing and its importance. It served as strong motivation for their studies in the future.

Key words : Purpose of training, nursing process, assistance skills